

第1章 西トップ遺跡の調査と修復

第1節 修復の経緯

平成13年度、奈良文化財研究所は現地の文化財保護組織 APSARA（アンコール・シェムリアップ地域遺跡保護整備局）と協議をおこない、アンコール・トムの遺跡群の中でも遺跡存続年代が比較的長く、仏教的な要素も濃い遺跡として、西トップ遺跡（第1図）を調査対象地として選定することになった。

西トップ遺跡は、アンコール・トムの中心寺院バイヨンから西門へ至る東西道路を西へ500m、南へ50mほどの位置にある。これまでその存在は知られていたが、詳細な調査研究がなされていなかった。アンコール王朝の局勢期であるバイヨン期よりも後世のポスト・バイヨン期以降も存続したとされる遺跡で、当該期のアンコール・トム内の遺跡のあり方や、アンコール王朝崩壊後にあたるポスト・アンコール期をも対象に含める広範囲な時代が調査対象となった。平成15（2003）年8月の第1次発掘調査を皮切りに、考古学・建築史学・保存科学などの面から鋭意調査を進め、平成22年度にはそれまでの調査結果をまとめ、日本語版と英語版の報告書を刊行した（1、2）。

2008年5月26日、中央祠堂東側破風部分の石材40個あまりが落下した。その前々年にカンボジア側により中央祠堂頂部に繁茂していた樹木が伐採されたために、樹根が抱えていた石材が不安定となったため崩落したとみられる。この石材落下に伴って、かろうじて均衡を保っていた中央祠堂上部の石材全体が不安定化した。急遽、APSARAと協議を重ね、日本国政府アンコール遺跡国際調査団（JASA）のご協力を仰ぎ、独立行政法人第3次中期計画（2011年度から2015年度）より修復工事に着手することが決定された。



第1図 西トップ遺跡修復前風景（南東から）

修復開始にあたっては、中央祠堂と比べ小型の南北両祠堂から着手することにした。南北両祠堂では、南祠堂の方が躯体部の残りが良好であるとともに、石材が大きく解体の手間が北祠堂と比べ少ないと推定されたため、南祠堂の解体修復で工法・進行等の習熟度を高めた後、続いて北祠堂、中央祠堂の順に解体修復を進めることとした。2011年12月14日にAPSARA・東京文化財研究所・奈良文化財研究所間で新たな覚書を交わし、2012年3月9日より南祠堂の解体作業を開始した。

南祠堂は躯体部・上成基壇・下成基壇からなる。屋根にあたる屋蓋部はほとんどが失われ、躯体部は南に約19度傾いていた。上面から順に1層ずつ平面図作成、石材番付、解体を繰り返し、躯体部の解体を進めた。躯体部解体後は、基壇部の調査を進めた。下成基壇最上面は砂岩敷石面であったが、不等沈下を起し、中央部から南にかけて20cm以上沈下した状態であった。敷石面を解体すると、基壇内に充填されていた基壇土が粗砂であることが判明した。この基壇土を発掘すると中央祠堂下成基壇の南階段が検出された。基壇部の最下層解体後、現基壇の南側延石直下から基礎の掘込地業が確認されるとともに、石列が検出されたが、それ以上地下に続くものではなかった。2014年10月からは基壇下の地業部から再構築を開始し、2015年9月23日には南祠堂の調査修復を完了した。

2016年2月、北祠堂の解体に着手した(第2図)。3月には順調に躯体部の解体を終了するとともに、周辺に集められていた散乱石材の番付と調査をおこなった。北祠堂は全体が北側に倒れこんでおり、躯体部の崩壊が南祠堂と比べてより進んでいた。躯体部の解体が終了したのち、基壇部の調査に取りかかった。基壇の築盛状況を把握するため、南北にトレンチを設定したところ基壇地下にレンガ造遺構が存在することが判明した。発掘調査を進めたところ、レンガ2m四方、深さ約1.5mのレンガ造の地下室状遺構が検出された。床面直上からは金製品をはじめとした金属製品、水晶、ガラスビーズ、焼骨片などが出土した。また、レンガ造遺構ならびに出土遺物に被熱の痕跡が認められ、多くの炭化物の出土も確認した。

レンガ造遺構に関して詳細な調査をおこなった後、遺構保存のためにオリジナルの赤褐色粗砂を主とした改良土で埋め戻し、基壇の再構築をおこなった。躯体部の再構築に際しては、東正面を除く3面の偽扉全てに如来立像が彫りこまれていたことが判明した。周辺の散乱石材の調査を経て、崩壊していた北面も含め全ての偽扉を復元することができた。2017年12月に北祠堂再構築を完了した。

(1) 奈良文化財研究所 2011 『奈良文化財研究所学報 88 西トップ遺跡調査報告－アンコール文化遺産保護共同研究報告書－』

(2) Nara National Research Institute for Cultural Properties, 2012, *Western Prasat Top Site Survey Report on Joint Research for the Protection of the Angkor Historic Site.*



第2図 北祠堂修復前(左)、修復後(右)(東から)

第2節 中央祠堂修復調査の進捗

2018年1月より中央祠堂の解体調査を開始した（第3-6図）。これまでの南祠堂、北祠堂と同様に上部から調査・解体し、順次、地上のコンクリートベース上で仮組をおこなった。躯体部解体後は、基壇部上面の調査をおこなった。調査の結果、上成基壇中央には近代に開けられたとみられる盗掘坑の存在が明らかになった。このため、発掘調査の後に盗掘坑を改良土で埋め戻した。

基壇部外装の解体にあたっては、20世紀前半にマルシャルによって指摘されていた仮説である、中央祠堂の砂岩外装の内側に別のラテライト基壇が存在する可能性に注意を払う必要があった。先行調査の結果、実際に砂岩外装の内側にラテライト基壇の存在を部分的に確認した。そのため、調査の手順として、砂岩外装のみ順次1/4ずつ解体し、順に露出したラテライト基壇の調査をすることとした。

その結果、ラテライト基壇も外装の砂岩基壇と同様に上成、中成、下成の3段構成であることが判明した。ラテライト基壇の保存状態を精査した結果、ラテライト基壇は解体せずにオリジナルを保存するため、必要な箇所に対して一部修復を施すにとどめた。このラテライト基壇は、再構築に伴い、砂岩外装で再び



第3図 中央祠堂修復前状況（東から）



第4図 中央祠堂修復前状況（北東から）



第5図 中央祠堂修復前状況（南東から）



第6図 中央祠堂修復前状況（西から）

おおわれることになるため、3D 測量、写真撮影なども含めた可能な限りの記録保存をおこなった。東正面に関しては中央祠堂基壇部と接続している仏像台座とその周辺の発掘調査をおこなった。

中央祠堂の再構築

中央祠堂基壇部の再構築は、下成基壇の砂岩外装から順に進め中成、上成基壇、その後に躯体部へと進めた（第7, 8 図）。躯体部は開口部とその上部に設置されるリントルを境に構造が異なるため、躯体部上部と下部に分けて作業を進めた。第 25 層から第 16 層までの躯体部下部の再構築では、東西南北各面の開口部にあたる扉枠を先行して組み上げ、その後に壁面を積み上げていった。このうち、破損や劣化により再利用が困難な部材に関しては、接合または新材に置き換えている。

開口部の扉枠・コロネット・リントルは、他箇所で使用される灰色砂岩とは異なり、赤色砂岩が使用されている。このうち、一部のリントルとコロネットは、他のペディメント材などと共にシムリアップ市内のアンコール保存事務所に保管されていた。文化芸術省と協議の上、これら装飾石材に関しては、西トップ遺跡現地に返還し原位置へ戻す方針となり、2020 年 10 月にアンコール保存事務所から西トップ遺跡に移送され、再構築のため現地で修復・接合作業を進めた。2021 年 4 月より開口部上にリントルの設置を開始し、躯体部上部の再構築作業へと移行した。



第7図 中央祠堂修復作業風景
(北西から)



第8図 中央祠堂修復作業風景
(東から)

躯体部上部の再構築

躯体部上部は第15層から第8層までで、第1ペディメント部分もここにあたり（第10図）、東西南北各面の開口部上部に配置される。第7層から第1層にあたる屋蓋部には上層の第2ペディメントが存在したとみられる。調査開始時には既に石材の多くが崩落し、多くの欠損部材が存在した。それら過去に崩落した石材は、20世紀初頭のフランスによる西トップ遺跡整備の際に除去され、遺跡敷地内にまとめて積み置かれている状態であった。再構築にあたっては、千を超える崩落石材の中から、中央祠堂躯体部上部に該当する石材を探し出す作業が必要とされた。そのため、コンクリートベース上に仮組する際に、欠落部分に一点一点あてはめていく作業をおこなった（第11図）。また、アンコール保存事務所に保管されていた部材のうち中央祠堂のペディメント部分に該当するものは、仏陀像など図像の中核を担う部材を多く含んでいた。ペディメントの一部はフランス極東学院による古写真に記録されていたため、解体前の躯体部上部の図面と古写真などを参照しながらペディメントの再構築をおこなった。



第9図 中央祠堂古写真（北東から）
(ESEO_CAM01489)



第10図 中央祠堂躯体部上部解体前状況（北東から）

第1ペディメント詳細

東面（第12図）

第1ペディメントは、他のアンコール遺跡に見られるペディメントと同様、帯状装飾で区画された龕内に半肉彫りで主題の図像を表現している。ペディメントの両端には冠状の装飾を冠した5頭のナーガが立体的に表現されているが、これらの構成は第1ペディメントの4面共で共通である。東面ペディメントは、フランス極東学院による古写真で当時唯一原位置を保っていたことが確認できるペディメントである（第9図）。ペディメントの龕内では、偏袒右肩の仏坐像が半跏趺坐で触地印を結ぶ様子が表されている。仏坐像頭部の上には菩提樹の葉が表現され、仏坐像の肩部付近まで葉文が続いている様子を見て取ることができる。この東面仏坐像では該当する仏坐像頭部、胴部、台座部分の石材が現時点では未確認である。

西面（第13図）

西面ペディメントは古写真では確認することができなかったが、散乱石材の中から該当部材を発見し、ほぼ完全な形で復元することができた。龕内では半跏趺坐で触地印を結ぶ偏袒右肩の仏坐像が表されているが、東面に見られた菩提樹は表現されていない。顔貌は摩滅と欠けのために判然としない箇所もあるものの、目は切れ長で目尻が上がり、眉はやや弓形である。肉髻は細かな単位での螺髪が表現されているが、頂部に火焰型装飾が載っていたかどうかは定かではない。仏坐像が坐す台座は3層の文様帯で構成されている。上段には花卉文様帯、中段に複弁蓮弁文様帯、下段に蓮蕾状文様帯が表現されており、台座中央部には花卉文様を有する方形の装飾が表現されている。

南面（第14図）

南面も古写真には記録されていなかった。仏坐像の脚部は該当する石材を探し当てることができているが、残念ながら胴部以上の石材に関しては今までのところ発見に至っていない。脚部に見られる表現から、おそらく他面と同様に半跏趺坐で触地印を結ぶ仏坐像が表されていたものと推定できる。仏坐像上部には菩提樹の葉が彫りこまれている。台座は蓮弁が上段に、反花が下段に表され、台座中央部には逆三角形を呈した花卉文様を有する装飾が見られる。

北面（第15図）

北面も古写真で確認することはできなかったものの、仏坐像の頭部を除きほぼ完全に復元することができた。偏袒右肩の仏坐像が触地印を結び半跏趺坐で台座上に坐している。西面同様、仏坐像の上部には菩提樹の表現は見られない。台座は西面と類似した構成で、上・中・下段の三層の文様帯で構成され、上段には花卉文様帯、中段に複弁蓮弁文様帯、下段には蓮蕾状文様帯が表現されている。西面台座で見られたような布または装飾の表現は見られない。



第11図 中央祠堂躯体部上部仮組風景（南東から）

これら第1ペディメントに関しては現時点では欠損部材も多いため、該当する石材の搜索を続けるとともに、躯体部上部の仮組を引き続きおこなっていく予定である。



第 12 図 中央祠堂第 1 ペディメント東面仮組



第 13 図 中央祠堂第 1 ペディメント西面仮組



第 14 図 中央祠堂第 1 ペディメント南面仮組



第 15 図 中央祠堂第 1 ペディメント北面仮組